

論文

Chi-Altar の所在についての一考察

佐藤 孝裕

【要旨】

いわゆる Chi-Altar 文字は、エル・ミラドールのように、マヤ低地南部の先古典期の大遺跡を表すと推測されることが多い。しかし、この文字が初めて生起するのがティカルの石碑 31 であり、このモニュメントが「エントラダ」の記念碑的存在であること、加えて“chi”はマゲイを意味し、メキシコ中央高原での栽培が知られる乾燥に強い植物であることなどを勘案すると、Chi-Altar は本来テオティワカンを表す文字だったと考えられる。この文字は、「エントラダ」の担い手やその後継者たちが、テオティワカンを表す文字として考案したものであり、彼らはこの場所に言及することで、自分たちの出自がテオティワカンの権威に由来することを顕示した。その後、Chi-Altar の地は、低地南部マヤ社会で王朝創立者の権威の源として認識されるようになった。しかし、時間の経過と共に、Chi-Altar がテオティワカンであるとの認識が薄れ、とりわけ古典期後期には、Chi-Altar は王朝の正統性を根拠付けるような一般名詞的地名になっていった。

【キー・ワード】

Chi-Altar、エントラダ、ティカルの石碑 31、テオティワカン、マゲイ、王朝創立

1、はじめに

古代メソアメリカの諸民族は、自らの偉大な祖先に関わる伝説的な場所の記憶や伝承を共有していた。その代表的なものがトラン Tollan¹ である。アステカ人の中では、トゥーラ Tula、テオティワカン Teotihuacan、 Cholula がトランとみなされていたし、また後古典期のマヤ人にとってはチチェン・イツァ Chichen Itza がトランだったであろう。いずれの都市も、スペイン人が到来する時まで繁栄を続けた Cholula を除けば、伝承を語り伝える同時代の人々にとって、偉大な先祖の栄光を称えるにふさわしい威容を誇る遺跡である。また、古典期後期のメキシコ中央高原の人々が、神話上の起源の地と考えていたタモアンチャン Tamoanchan² も、トランと同様の性格を持つ場所の一つである。この場所は、植民地期の 16 世紀にアステカの貴族が編纂した『フィレンツェ絵文書』によると、ワステカ・マヤ Huasteca Maya 人の居住地であるメキシコ湾岸地方にあったと信じられていたようである (Miller and Taube 1993: 160)。

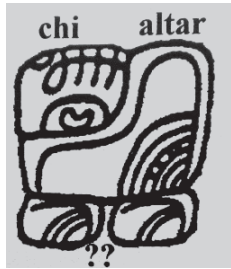


図1 Chi-Altar文字
(Wanyerka 2009
Figure 7.10 を転載)

古典期後期、ツイバンチェ Dzibanche、ティカル Tikal、ヤシュチラン Yaxchilan、パレンケ Palenque、コパン Copan、プシルハ Pusilha などマヤ低地南部のいくつかの遺跡のモニュメントや遺物にも、王朝の歴史の遙か彼方に遡る出来事への回顧に関わるとされる特徴的な文字が現れる。それは、掌を載せた座椅子のような物体と、二つないし一つの団子状の基部から成る奇妙な文字である (図1)。この文字は、従来 Chi-Altar、Chi-Cauac、Chi-Bent Cauac、Chi-Witz、などと様々な名称で呼ばれている (Tokovinine 2013: 79; Wanyerka 2009: 317)。近年、この文字を「チチャ (chicha')」と読むべきであり、「マゲイ (リュウゼ

ツラン)・メタテ」の意だとの説も提唱されている (Canuto, et al. 2020: 376; Martin 2020: 120, 407 註 14; Stuart 2014)。しかし、今現在まだどの読み方も定着しているとは言い難いので、本稿では便宜的に「Chi-Altar 文字」としておく。

また、この場所で起こった出来事の主役としてしばしば登場するのが「葉のあるアハウ (Foliated Ajaw)」とあだ名される人物である。Chi-Altar とはどのような場所であり、この場所に関わりを持つとみられる「葉のあるアハウ」とは何者かを、具体的な生起例を通して探るのが、本稿の目的である。

2、「Chi-Altar 文字」を巡る諸説

「Chi-Altar 文字」の所在地に関する説は、二つに大別できる。一つは、歴史上実在したある場所を指すと考える立場である。もう一つは、神話上、換言すれば過去の世界に存在したとして作り出された想像上の場所とする解釈である。

前者の場合、その条件として、遙か後の時代にまで語り継がれ、あるいはその存在の記憶が残った場所である、ということが求められる。この条件を満たすのに相応しいのが、目を驚かすような壮大な規模を誇る遺跡である。先古典期に存在した巨大な遺跡の数は少ないが、その中でも誰もが容易に想起するのがグアテマラのペテン Peten 地方にあるエル・ミラドール El Mirador である (図2)。エル・ミラドールは紀元前 300 年頃から紀元後 150 年頃まで栄えた都市で、古典期が始まる直前に放棄されたのだが、最大の建築コンプレックスであるダンタ Danta・ピラミッドの高さは 72m にも達した。これは、古典期で最も高い建築物であるティカルの神殿 4 の高さ 65m を上回り、とりわけ容積の点では古典期のどの建築をも遙かに凌駕した³。しかしながら、判読できる碑文が残っていないため、その歴史は全くわかっていない。放棄された理由も、森林の過度の伐採とそれに伴って生じた土壌の喪失が指摘されているが、詳細は不明である。古典期以前に繁栄し、比類のない巨大な都市を擁したにもかかわらず、どのような国家であったのか、また後に続く古典期の国家とどのような関わりを持っていたかは解明されていない。建築群の群を抜く壮大さは一目瞭然であるにもかかわらず、実像が皆目つかめないのである。エル・ミラ

ドールが持つこのような特性が、その存在を実際以上に大きく見せている感は否めない。そして、



図2 エル・ミラドールの想像復元図（Hansen 2000: 79 を転載）左手奥に見えるのがダント・ピラミッド・コンプレックス

現在の我々が持つと同じような感懐を、古典期のマヤ人も抱いていたのではなかろうか、と想像させるのであろう。言うなれば、古典期のマヤ人にとってのエル・ミラドールは、アステカ人にとってのテオティワカンのようなものだったのではなかろうか、というわけである。このように、エル・ミラドールが Chi-Altar の有力な候補地であるとする研究者は少なくない（Grube 2004: 130-131; Hansen et al. 2008: 59; Martin 2016: 532; Wanyerka 2009: 325, 535）。前の章でトランとタモアンチャンに言及したが、いずれも語義は湿地帯に関連するものであった。とりわけ、タモアンチャンが「霧が立ち込めた地」を意味することを勘案すると、熱帯雨林地帯の只中にあるミラドール盆地⁴はその候補地として相応しく、古典期のマヤ人がこの場所を偉大な先祖の故地と信じたとしても不思議ではない（Hansen et al. 2009: 27; Hansen 2016: 409-410, 416）。

これに対して、後者の場合は想像上の場所であり、実在しないことになる。Chi-Altar が実在したかどうかを考える上で参考になるのが、この場所と関連してしばしば生起する 8.6.0.0.0（159年12月19日）という日付である。古典期に繁栄する王国にとって、かなり古い時代ではあるが、それより数百年前にエル・ミラドールのような巨大な都市が建設されているのは先述した通りである。また、この時期までに既にティカルで王朝が誕生していたことも確実視されている。つまり、「神話的」、換言すれば歴史の遙か彼方で、神々が活躍するような想像の世界の時代ではない。逆に、数千年前の、正に神話的と呼べるほどの過去の出来事に言及した碑文が、いくつも発見されている。たとえば、パレンケでは、紀元前四千年紀の神々の物語が記されている（Stuart and Stuart 2008: 211-215）。このことから、Chi-Altar が記されたテキストには何らかの史実が反映されていると考えるべきであり、その出来事が生じた Chi-Altar の地は実在の場所であった可能性が高い

と言える。

次章では、Chi-Altar 文字がどの遺跡でどのようなコンテキストで現れているのかを、具体的に検証してみたい。

3、低地南部マヤ遺跡で見られる Chi-Altar 文字の諸例

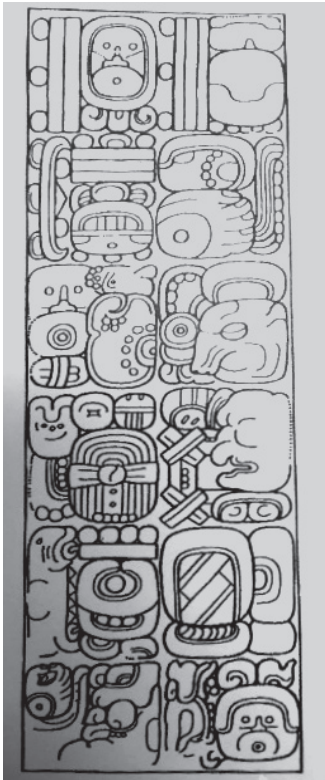


図3 ティカルの石碑 22
(Wanyerka 2009 Fig.7.12 を
一部改変)

Chi-Altar が、いくつかの遺跡の碑文テキストで、王朝の起源に関わるコンテキストでしばしば言及されることや、この場所に関わる人物の多くが王朝の創業者であることは、これまでも様々な研究者によって指摘されている (Canuto, et al. 2020: 376; Grube 2004: 130-131; Prager et al. 2014: 286; Wanyerka 2009: 320)。この章では、この点について、具体的な生起例に当たることで検証したい。

(1) ティカルの事例

ティカルの石碑 22 の碑文には、カレンダー・ラウンドによる 9.17.0.0.0 13 アハウ (Ajaw) 18 クムク (Kumku') (771年1月20日) のカトゥン完了の日付に続いて、第29代王ヤシュ・ヌーン・アイーン Yax Nuun Ayiin 2 世の名前、ティカルの紋章文字、王朝の創始者ヤシュ・エフブ・ショーク Yax Ehb' Xook の名前、第29代王と続いた後に、Chi-Altar 文字がカウィール K'awiil と共に生起し、最後に「葉のあるアハウ (Foliated Ajaw)」が現れている (図3) (Schele and Freidel 1990: 140; Stuart 2004: 219; Tokovinine 2013: 119-120; Wanyerka 2009: 320-322)。

カウィールは王権と密接に関わる神であり、そのため王はしばしば「マニキン・セプター (mannequin scepter)」と呼ばれるカウィール神を象った王錫を握って立つ姿で描かれる (Bezanilla 2006: 47; Coe and Stone 2005: 112)。また、ティカルの「暗黒時代」を終わらせ、カーン王国に対する戦勝をもたらした26代王ハサウ・チャン・カウィール Jasaw Chan K'awiil 1 世のように、王名の一部にこの神の名を取り入れている例も少なくない。カウィール神の名を加えることにより、自らの王としての地位が神に由来することを顕示しようとしたのであろう。このように、カウィール神は言わば王権を象徴する神である。Chi-Altar 文字がそのカウィール神と同じマスの中に納まっているということは、両者に強い関連性があることを窺わせる。すなわち、Chi-Altar という場所は王権と関わりがあるということである。ティカルの紋章文字から「葉のあるアハウ」までの文字は、直前のヤシュ・ヌーン・アイーン 2 世を修飾する文字句であるが、その中にヤシュ・エフブ・ショーク

の名が入っていることから、Chi-Altar とカウィール神、更には「葉のあるアハウ」も王朝創始者のヤシュ・エフブ・ショークと結びついていると考えられる。

Chi-Altar 文字は、シフヤフ・チャン・カウィール Sihyaj Chan K'awiiil 2世が 9.0.10.0.0（445



図4 ティカルの石碑 31 の一部 (Stuart 2004 Figure 11.2 を転載)



図5 ワイ (Coe and Stone 2001 p.121 の図を転載)

年 10 月 18 日) の期間の終わりを記念して建立した石碑 31 でも、8.14.0.0.0 (317 年 8 月 31 日) 以前にある出来事が起こった場所として言及されている (図 4) (Grube 2004: 130; Martin 2016: 531-532; Stuart 2004: 219; Wanyerka 2009: 320-322)。ここでは、この出来事に関連する人物として「葉のあるジャガー (Foliated Jaguar)」の名が、カロームテ (kalomte') 称号を伴って挙げられている (Canuto, et al. 2020: 376; Martin 2016: 531-532, 2020: 120-121)。「葉のあるジャガー」は、コスタ・リカ出土のヒスイ製の斧のテキストにも生起しているが (Martin 2003: 6)、彼が何者かはよくわからない。ティカル王朝の初期の王の一人と考える説がある一方 (Brown and Witschey 2016: 346)、必ずしもティカルの王とは限らないとの説もある (Martin and Grube 2008: 27)。また、グルーベは、この文字は「葉のあるアハウ」を冠したジャガーを表していて、「葉のあるアハウ」と同一人物であると推測している (Grube 2004: 130)。ライオンやトラが生息しない新大陸では、ジャガーが最強のネコ科動物であった。メソアメリカに限っても、ジャガーは古くから畏怖されると同時に崇められた。マヤの支配者たちは好んで最強の動物ジャガーの皮を身にまとい、ジャガーの皮で覆われた玉座に座り、自らの権威の強大さを誇示した。また、マヤ地域のエリートの間では、霊的世界に属しているもう一人の自分とでも言うような、ワイ (way) と呼ばれる一種の超自然的な存在が信じられていた。そのワイを表す文字は、右半分がジャガーの身体の斑点で表されている (図 5)。王とジャガーとの関連を示す事柄は、宗教儀礼にも見られる。マヤの王がシャーマンとして変身する際、動物の姿を取ると信じられていたのだが、その最も一般的なものがジャガーだったのである (Miller and Taube 1993: 103)。更には、ヤシュチランの王ヨパート・バフラム Yopaat Bahlam に見られるように、自らの名前の一部にジャガー、すなわちバフラムを採用した王も少なくない。このように、マヤ地域では、

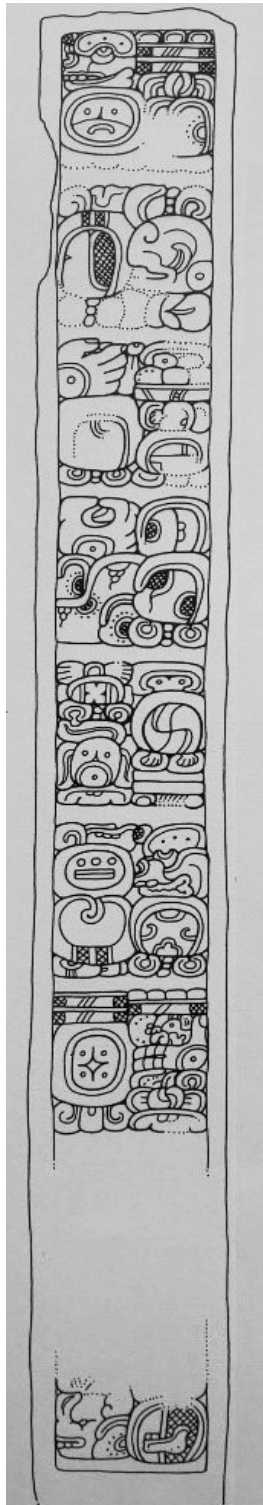


図6 コパンの石碑I (Fash 2001 41を一部改変)

ジャガーは様々な形で王と結びついていた。

ワイの文字の左半分はアハウに酷似している(図5)。一つの可能性として、この文字はジャガーに変身したアハウ(王)を表しているのかも知れない。であるならば、グルーベが指摘するように、「葉のあるジャガー」は「葉のあるアハウ」と同一人物であるとも考え得る。この文字が刻まれた石碑31が建立されたのは445年頃で、「葉のあるアハウ」が生起するより150年ほど早い。「葉のあるジャガー」は「葉のあるアハウ」の初見例であり、先駆形態だったのかも知れない。

ただ問題なのは、「葉のあるジャガー」がカロームテ称号を伴っている点である。「葉のあるジャガー」が実在の王であるとする、現在の碑文史料による限り、彼は史上最初にカロームテを称した人物だということになる(Martin 2020: 404)。これに対し、「葉のあるアハウ」がカロームテを伴っている例は一つもない。この点を考慮に入れると、この両者を同一だとする仮説は魅力的ではあるが、現時点で結論付けるのは困難であると言わざるを得ない。

(2) コパンの事例

9.9.14.17.5 6 チクチャン (Chicchan) 18 カヤップ (K'ayab) (628年2月5日)に即位したコパンの12代王カフク・ウティ・ウィッツ・カウィール K'ahk Uti' Witz' K'awiil が建立した石碑Iの碑文には、「葉のあるアハウ」がChi-Altarの地で8.6.0.0.0のカトゥン完了の儀式を監督したと記されている(図6)(Grube 2004: 129; Fash 2001: 52; Martin 2016: 531; Schele and Freidel 1990: 309; Stuart 2004: 219, 220-221; Tokovinine 2013: 79; Wanyerka 2009: 317)。Chi-Altarの地で最後に出来事が起こったのがこの8.6.0.0.0という日であり、同じ日付は、第13代王ワシャクラフーン・ウバーフ・カウィール Waxaklajuun Ub'aah K'awiil が建立した石碑4にも生起する。碑文では、石碑奉納の9.15.0.0.0 4アハウ13ヤシュ(Yax) (731年8月18日)に続いて8.6.0.0.0に一気に遡り、この日に"chan te' chan"「四つの天(four heavens)」と関連する出来事が起こったこと、続いて"ch'am ik' hu'un"「黒いヘッドバンドを受け取った」とあり、その場所としてChi-Altar文字が挙げられている(図7)(Stuart 2004: 216-219; Wanyerka 2009: 317, 321 Fig 7.11 A)。その208日後の8.6.0.10.8 10ラマツト(Lamat) 16 ポープ(Pop) (160年6月14日)という日付

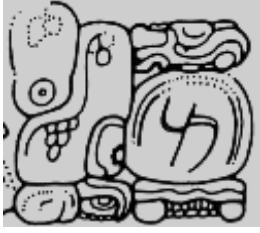


図7 コパンの石碑4の一部 (Fash 2001 41を改変)

が石碑Iに記され、最後の段には鼻が上を向いたコウモリの横顔の文字、及び”chan-ch’een”「空の穴 (sky-cave)」という場所を表す文字が生起している (Wanyerka 2009: 318-320)。コパンの紋章文字の主字は正にこの上向き鼻のコウモリであり、スチュアートは、この日がコパン王国の成立と関わりがあると指摘している (Stuart 2004: 219)。すなわち、「葉のあるアハウ」は Chi-Altar 文字の場所でコパン王国成立に関わる重要な役割を果たし、そこからコパンに行くのに 208 日を要した、というわけである (Stuart 2004: 220-221)。



図8 コパン墳墓1出土のペッカリーの頭骨の彫刻の一部 (Fash 2001 24を改変)

石碑Iで 8.6.0.0.0 のカトゥンを完了させたとされている「葉のあるアハウ」の名は、墳墓1出土のペッカリーの頭骨⁵に刻まれたテキストにも生起している。頭骨の中央に彫られた四箇所凹部のある円形の囲いの中で、衣装から貴人と見られる二人の人物が座して会談している様が彫刻されているのだが、二人の頭の上に正方形の枠があり、内部に四つの文字が刻まれている。上の2文字は1アハウ8チェン (Ch’en) という日付、すなわち 8.17.0.0.0 (376年10月20日) のカトゥン完了の日であり、下に “k’[a]laj tuun” 「提出された」あるいは「石が縛られた」と言う行為、続いて「葉のあるアハウ」の名が記されている (Fash 2001: 52, 88; Grube 2004: 129; Stuart 2004: 213) (図8)。なお、石碑Iとペッカリーの頭骨に刻まれた「葉のあるアハウ」のいずれかが、この文字の最古の生起例である。

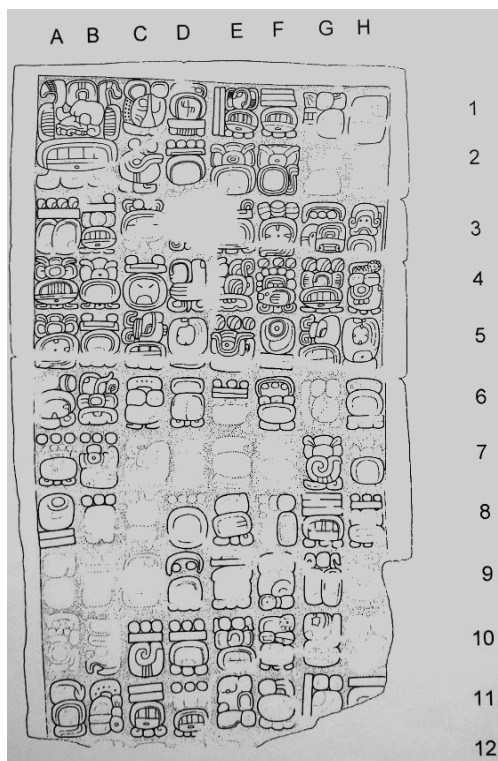


図9 プシルハの石碑P (Prager et al. 2014 FIGURE 10.19 b を転載)

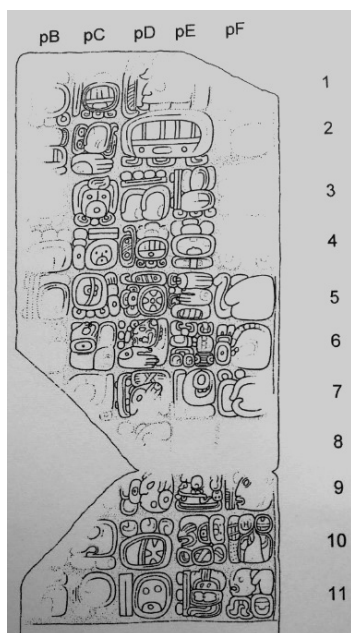


図10 プシルハの石碑K (Prager et al. 2014 FIGURE 10.23 a を転載)

(3) プシルハの事例

プシルハは、これまで述べてきた主要都市とは対照的に小規模な遺跡であり、盛期の人口は7000人ほどであったと推定されている (Prager et al. 2014: 257, 298)。都市の歴史も比較的新しく、創建されたのが古典期前期の終わり頃であり、繁栄した期間も600年頃から790年頃までと短い⁶ (Prager et al. 2014: 269, 298)。

この国の第2代B王⁷ (カック・ウ・チャン K'ak' U Chan) が9.10.15.0.0 (647年11月10日)の期間の終わりを祝すためと同時に、父親でありかつ建国者の初代A王 (カウィール・チャン・キニチ K'awil Chan K'inich)⁸の顕彰碑として建立した石碑Pで、この石碑奉納の出来事と8.2.0.0.0 5アハウ8サック (Sak) (81年2月9日)⁹にChi-Altar 文字の場所で起こった事柄を結び付けている (図9) (Braswell et al. 2004: 229; Grube 2004: 129; Prager et al. 2014: 286; Wanyerka 2009: 317)。Chi-Altar (G10)の前後の文字 (H9とH10)は摩滅していて判読できないのだが、ここに「葉のあるアハウ」が刻まれていた可能性をグルーベは指摘している (Grube 2004: 129)。なお、導入文字に続いて9.7.0.0.0 (573年12月5日)の期間の終わりを示す日付で始まった碑文では、A王が9.6.17.8.18 (571年6月17日)に最初の神聖王 (クフル・アハウ (k'uhul ajaw))の座に就いたことの証として、初めてプシルハの紋章文字が現れている (Wanyerka 2009: 348-351, 378)。しかも、注目されるのは、彼は単に神聖王であっただけでなく、石碑Dではオチキン・カロームテ (ochk'in kalomte')¹⁰「西のカロームテ」の称号を伴っていることである (Prager et al. 2014: 277)。9.14.0.0.0 (711年12月1日)の期間の終わりを記念して石碑Mを

建立したE王も、同石碑で自らの名前を述べる一連の語句の中にオチキン・カロームテを加えている¹¹が、これも自らの権威の正統性を顕示するために王朝創始者のA王に言及したものであろう¹² (Prager et al. 2014: 290-291)。

第4代のD王が9.12.0.0.0 (672年7月1日)の期間の終わりを記念して建立した石碑K (図10)でも、この記念日をChi-Altar文字の場所での8.6.0.0.0の期間の終わりに結びつけ、後者の祝祭の主役として「葉のあるアハウ」に言及している (Braswell et al. 2004: 229; Grube 2004: 129; Prager et al. 2014: 289; Wanyerka 2009: 322)。

(4) パレンケの事例

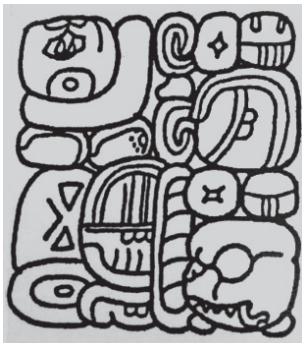


図11 パレンケの宮殿の家Cの碑銘の階段の一部 (Grube 2004 FIG.14A を一部改変)

パレンケの宮殿内の「家C」は、パレンケに最盛期をもたらした王キニチ・ハナブ・パカル K'inich Janaab Pakal 2世の治世の9.11.9.5.19 4カワック (Kawak) 2パシュ (Pax) (661年12月22日)に奉獻された建物だが、その碑銘の階段1には、ヨフル・イクナル Yohl Ik'nal 女王¹³ 治下のラカムハー Lakamhá、すなわちパレンケがカーン Kaan¹⁴ 王国の攻撃を受けたことが記録されている (Martin and Grube 2008: 105, 159-160; Stuart and Stuart 2008: 140-141, 158-159; Wanyerka 2009: 320)。碑文には、9.8.5.13.8 6 ラマツト 1 シップ (Sip) (599年4月21日)の日付と共に、Chi-Altar地名、ヤハウテ (yajawte')、「空の証人 (Sky Witness)」、そしてカーン王国の紋章文字が刻まれている (図11)。

ヤハウテという語については、いまだ詳細は不明である。マーティンは、多様な解釈がなされていると断りつつ、「木の主 (Lord of the Tree)」と訳し得るある種の個人的称号であり、リネージのような意味合いを持っていた可能性を指摘している (Grube 2004: 130; Martin 2020: 407)。他方、パレンケにおけるこの事例や、ヤシュチランのリンテル21、あるいはナーチトゥン Naachtun の石碑24の事例に基づき、戦争指揮官のような軍事的色彩のある称号だとする説もある (Hansen, Richard D. et al. 2008: 60; Nondédéo, et al. 2014: 117, 2019: 55-60; Tokovinine 2008: 268)。リネージであれ、戦争指揮官であれ、この場合「空の証人」を指すのであろう。

「空の証人」は、561年頃から572年頃までカーン王国を統治した王であり、ティカルを562年に始まり692年まで続く「暗黒時代」に陥れた当事者である (Martin and Grube 2008: 39, 104)。従って、この碑文では、Chi-Altarの地はカーン王「空の証人」に関わる場所として挙げられていることになる (Tokovinine 2013: 79)。

(4) カーン王国の事例



図12 シャフハウゼン万聖博物館所蔵のシリンダー土器 (Prager 2004 Figure 2 を転載)

古典期にティカルと覇権を争ったカーン王朝の王に関わる遺物にも、Chi-Altar 文字が見られる。スイスのシャフハウゼンにある万聖博物館 (Museum zu Allerheiligen) 所蔵のシリンダー土器がそれである (図12)。チョコレート飲料用のコップとして用いられたこの土器の胴部に、マヤの諸王の中でただ一人「大王 (the Great)」の尊称で呼ばれることもあるユクヌーム・チェーン Yuknoom Ch'een 2世の名や肖像が彫られていること、また9.12.13.17.7.6 マニック (Manik) 5 シップ (686年4月3日) に製作されたと推測できることから、この土器はユクヌーム・チェーン2世その人の治世のものであると思われる (Prager 2004: 37-38)。この土器には、人間の頭部を象ったつまみのついた、逆さになった浅い皿状の蓋がある。傾斜した器壁にいわゆるプライマリー・スタンダード・シーケンス

(Primary Standard Sequence)¹⁵ が刻まれており、その中に Chi-Altar 文字が含まれている。すなわち、「mam (mam) (先祖) に続いて、ワク・チャン・ウィツィール Wak Chan Witzuil, Chi-Altar の人、ウィ・テ・ナーフ Wite' Naah の人」 (Tokovinine 2013: 78-79, 120)、そしてバカブ (bakab) と続いている (図13)。ワク・チャン・ウィツィールについては、カラクムルの創建者でありかつこのコップの所有者であるユクヌーム・チェーン2世の名との説 (Prager 2004: 37-38)、あるいはカーン王朝の王とトウモロコシ神をつなぐ神話上の地名ワク・チャン・ナル Wak Chan Nal と同一との説がある (Tokovinine 2013: 78-79)。

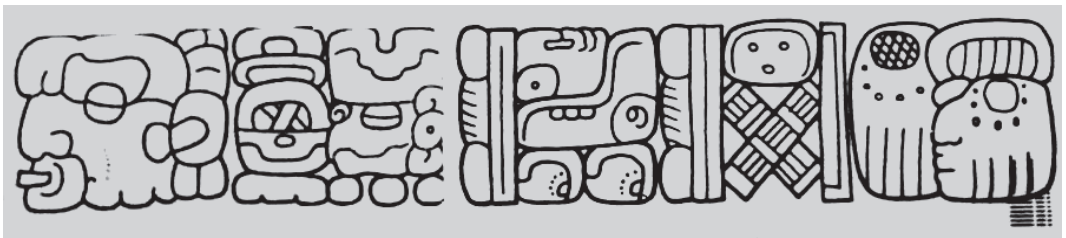


図13 シャフハウゼン万聖博物館所蔵のシリンダー土器のPSSの一部 (Prager 2004 Figure 12 を一部改変)

ウィ・テ・ナーフとは、古典期前期の500年頃以前、及び古典期後期の650年頃以降、マヤ低地南部のティカル、エル・ペルー El Perú、コパン Copan、キリグア Quirigua、トレス・イスラス Tres Islas、ヤシュチラン、マチャキラ Machaquila、プシルハなどの碑文に生起する文字である (図14)。「起源の家」と言う意であり、テオティワカンの太陽のピラミッドのアドサダ (Adosada)¹⁶ (図15)、ないしはテオティワカンの権威に由来するマヤ地域の建物を指す語であり、

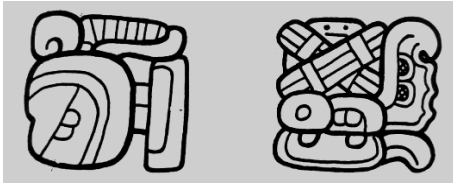


図14 ウイ・テ・ナーフを表す文字 (Fash W. et al. 2009 Figure 10. を一部改変)

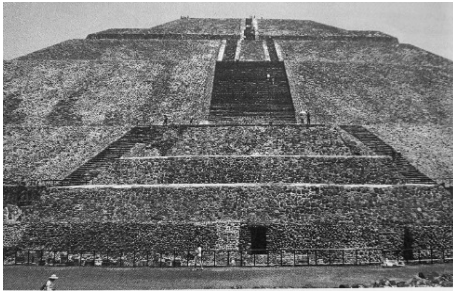


図15 テオティワカンの太陽のピラミッドとその正面下部にあるアドサダ (Fash, W. et al. 2009 Figure 1. を転載)

古典期マヤの王が新王朝を樹立するにあたって、即位の際にここで儀礼が行われた。このように、本来は建物の名称であったが、時の経過と共に個人の異名や王朝創立のような特別な出来事に関連する称号に転化したものである（佐藤 2014）。この土器に肖像が描かれているユクヌーム・チェーン2世は、マヤ地域においてティカルに匹敵する長い歴史を有する国家の王ではあるが、王国の創立者ではない¹⁷。しかし、カーン王国は7世紀前半にツイバンチェからカラクムルに遷都したことが確実視されている。そして、新都カラクムルで統治した最初の王がユクヌーム・チェーン2世なのである。その意味では、創立者に準ずる立場にある、あるいは実質的な創立者であるとは言える（Martin 2005: 11, 2020: 138, 250; Martin and Velásquez García 2016: 26-27; Tokovinine 2013: 71）。

バカブは、名前や称号等を記した一連の語句の末尾にしばしば生起する語だが、その意味は判然としない（Coe and Stone 2005: 78）。初代ユカタン司教ディエゴ・デ・ランダ Diego de Landa の『ユカタン事物記』や植民地時代の史料によると、ユカタン半島の住人の間では、各方位で天を支える職務を担っていた4人の兄弟神が崇拝されていて、その名称がバカブであった（Bezanilla 2006: 41; Milbrath 1999: 150; Taube 1995: 69）。天空を支えるというのは、この世界が存続するために不可欠な、この上なく重要な仕事である。従って、バカブという称号には、この自己犠牲的で崇高な使命を担う者への賛辞、ないしは自負のニュアンスが込められていると推測できる。事実、「天空を支える神」はメソアメリカでは王位と同一視され、その概念は古くは先古典期後期のオルメカ時代にまで遡り、後古典期のアステカ時代にまで存続した（Mary and Taube 1993: 154-155）。これを要するに、王朝創立者に等しい存在であり、バカブとして讃えられるユクヌーム・チェーン2世は、Chi-Altar と関わりを持つ存在だと宣言していると解釈できるのである（Tokovinine 2013: 120）。

カラクムルに遷都する以前にカーン王国の本拠地があったと考えられているツイバンチェで出土した「断片 (Fragment) 2」と「断片3」にも、Chi-Altar 文字は生起する（Martin 2020: 407）。とりわけ前者では、Chi-Altar 出身のある人物が捕らえられたことが記されている（Martin and Velásquez García 2016: 30）。戦争の際に、相手国の王や貴族を捕虜として捕獲することは、古典期マヤ社会においては頻繁に行われていた。従って、この出来事は神話的過去の世界でなく、現実社会で起こったと解釈され得る。このことからマーティンらはこのテキストが記された

7～8世紀頃、ツイバンチェ近郊に Chi-Altar という名の場所が現存していた可能性を指摘している。

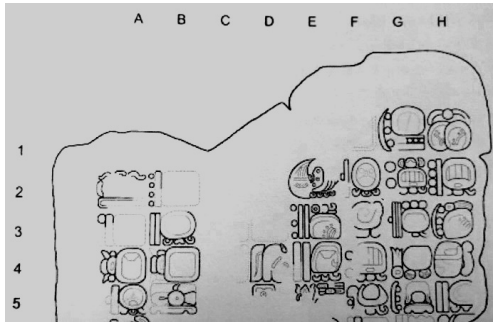


図16 ポル・ボックスの石碑2の上部 (Esparza Olguín and Pérez Gutierrez 2009 Figure 17. を一部改変)

ツイバンチェの南方10kmほどの所にある
 ポル・ボックス Pol Box の石碑2 (図16) で、
 9.7.10.0.0.6 アハウ13 サック (584年10月14日)
 の日付で始まる碑文の中に8.5.0.14.4 (141年
 1月11日) を指すと思われるカレンダー・ラウ
 ンドの日付10 カン (K'an) 12 ヤシュが刻まれ
 ている¹⁸ (Esparza Olguín and Pérez Gutierrez
 2009: 14)。ウイナル (Winal) とキン (K'in) の
 係数が0になっておらず、従って期間の終わり
 の儀礼が行われた日ではない。記録に残すべき

何らかの歴史的出来事が起こったことを表している可能性が高い。出来事の内容に劣らず重要な
 のはその時期である。すなわち、この日はマヤの周縁地域のモニュメントでしばしば生起する
 8.6.0.0.0 という期間の終わりに近似しているのである。スチュアートは、8.6.0.0.0 前後というマ
 ヤ地域ではきわめて古い日付が、チアパス州やグアテマラの太平洋岸、及びベラクルス州のメキ
 シコ湾岸近くに位置する遺跡のモニュメントに集中的に現れることに注意を促している (Martin
 2020: 121; Stuart 2004: 219)。それらの地域において古典期以前に建立されたモニュメントで、長
 期計算法の日付が記されているのは、下記の通りである (Macri 2011: TABLE 7.1)。

7.16.?.?.?	(前39年～前19年) タカリク・アバフ Takalik Abaj	(石碑2)
7.16.6.16.18	(前32年9月5日) トレス・サポテス Tres Zapotes	(石碑C)
7.18.9.7.12	(11年7月21日) エル・バウル El Baúl	(石碑1)
7.19.7.8.12	(29年5月7日) エル・バウル	(石碑1)
7.19.15.7.12	(37年3月6日) エル・バウル	(石碑1)
8.4.5.17.11	(126年6月6日) タカリク・アバフ	(石碑5)
8.5.16.9.7	(156年7月14日) ラ・モハラ La Mojarra	(石碑1)
8.6.2.4.17	(162年3月15日) トウストラ Tuxtla 小像	
8.7.3.2.13	(182年10月12日) チアパ・デ・コルソ Chiapa de Corzo	(石碑2)
8.8.0.7.0	(199年10月10日) ハウバーグ Hauberg 石碑	

出土地不明のハウバーグ石碑を除くと、遺跡の所在地はグアテマラ太平洋岸 (タカリク・アバフ、
 エル・バウル) とメキシコ湾岸 (トレス・サポテス、ラ・モハラ、トウストラ小像) の二つの地
 域に大別できる。チアパ・デ・コルソのみ、そのほぼ中間地帯に位置する。ラ・モハラの石碑1
 やトウストラ小像のテキストに代表されるものを、これらの遺跡がテワンテペク地峡にあること
 から地峡文字と呼ぶ。これに対し、エル・バウルやタカリク・アバフのモニュメントに刻まれた

文字が、初期のマヤ文字である。このように、この二つの地域は、初期段階において異なった文字伝統に属していた（Diehl 2004: 183-184; Macri 2011: 185-186; Sharer 2006: 225-227）。

これら一連の日付のうち、本稿で問題になるのは8バクトゥン（Bak'tun）に属する日付である。8.6.0.0.0を挟んでおよそ70年ほどに収まるこれらの日付は、時期的には8.6.0.0.0に近いが、いくつかの根本的な相違がある。一つは、これらのモニュメントを持つ遺跡は、低地南部マヤ地域ではなく、その周辺に位置していることである。二つ目は、ポル・ボックスの石碑2の日付と同じくトゥンとキンの係数が0でないので、期間の終わりの式典ではなく、何らかの出来事が起こったことを述べていると考えられることである。三つ目は、これらモニュメントにはChi-Altar文字が生起していないことである。これらのことを考え合わせると、8バクトゥンの日付が記された一連のモニュメント群と、8.6.0.0.0の日付が刻まれた古典期の低地南部マヤのモニュメントとの間に関連性を見出そうとするのは早計であろう。

ポル・ボックスが強大なカーン王国の拠点であったツイバンチュエに近接していることを考えると、ポル・ボックスと当時のカーン王国との間に何らかの関係があったことは十分想定できる。しかも、そのモニュメントに8.6.0.0.0に近い日付が記されている、すなわちこの頃きわめて重要な出来事が起こったという事実は看過できない。なぜなら、当時低地南部マヤ地域で徐々に王権が形成されつつあったからであり、中でも、長きにわたってカーン王国と競い合うことになるティカルでは、初代王のヤシュ・エフブ・ショークの治世が90年頃であり、いち早く王朝が成立したと考えられているからである（Brown and Witschey 2016: 346; Martin 2016: 532-533）。

(5) ヤシュチランの事例

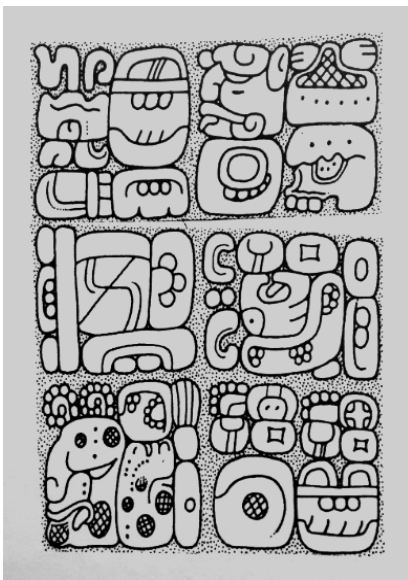


図17 ヤシュチランのリンテル21の一部（Grube 2004 FIG. 13を転載）

ヤシュチラン王の「鳥ジャガー（Bird Jaguar）」4世が752年に改築した建物22のリンテル21に、この建物を最初に奉献した第7代王「月の頭蓋骨（Moon Skull）」の記録が刻まれている（図17）。このリンテルは、表面全体が32の文字のみで覆い尽くされていて、そこでは、9.0.19.2.4.2カンキン（K'an kin）2ヤシュ（454年10月15日）の日付の後で、「月の頭蓋骨」、第7代、「Chi-Altar ヤハウテ」、ヨパート・バフラム、ヤシュチランの紋章文字と続いている（Grube 2014: 130; Martin: 2016: 531; Tokovinine 2013: 59; Wanyerka 2009: 322）。

ヤシュチラン遺跡が位置する地域一帯は、先古典期の居住地のほとんどが350年までに放棄され、その後ヤシュチランや同じウスマシタ Usumacinata 川沿いを40kmほど下った所にあるピエドラス・ネグラス

Piedras Negras を核とする新たな地に人々が居住し始める (Martin 2020: 327)。現在残っている遺跡を拠点とした国家の起源もこの頃であり、その国家の創建者がヨパート・バフラム1世である。従って、碑文では、「月の頭蓋骨」を「Chi-Altar ヤハウテ」のヨパート・バフラムの第7代王と呼んでいると解釈したい。すなわち、初代王との関わりで Chi-Altar の地に言及しているのである。

4、考察—Chi-Altar 文字と「エントラダ (Entrada)」の関連性—

(1) ティカルにおける「エントラダ」

Chi-Altar 文字が生起するモニュメントの具体例を時間的観点から見ると、古典期前期にはティカルの石碑 31 のみであり、他は全て古典期後期のものである。空間的には、ティカルが位置するペテン地方のみならず、南東部やウスマシタ川流域、更には西部と、数が少ないとはいえ、低地南部一帯に分布している。とりわけ、最初に低地南部マヤ地域の中心に位置するティカルで出現した後、200年弱ほどの時を経て、南東の辺境部にあるコパンに生起している。ティカルとコパンとは、距離的に 300km 近く離れている上、生起した時間的観点からも遠く隔たっており、一見するとここには何ら関連性が存在しないように思われる。しかし、この両国は、ある歴史的事件を共有している。それは「エントラダ」である。この点について、述べていきたい。

先述したように、Chi-Altar 文字が初めて現れるのはティカルの石碑 31 であり、これは古典期前期の唯一の生起例でもある。この事実は、Chi-Altar 文字がどの場所を表すのかを考察する上で、重要な意味を持つと思われる。なぜなら、石碑 31 は、378年にティカルで起こった「エントラダ」と呼ばれる政変について詳細に語っているモニュメントだからである。この事件は、その後のマヤ社会の諸国家の動向にきわめて大きな影響を与えることになる。

「エントラダ」の概要は次の通りである。8.17.1.4.12 (378年1月15日)、西のカウィールであるシフヤフ・カフク Sihyaj K'ahk' がティカルに「到着¹⁹⁾」し、同日ティカル王のチャック・トック・イチャーク Chak Tok Ich'aak 1世が死去する。8.17.2.16.17 (379年9月12日)、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世が即位し、シフヤフ・カフクはカロームテ位に就く。このティカルの政変に端を発する「新しい秩序 (New Order)²⁰⁾」が、低地南部マヤ社会に波紋を広げていく。

Chi-Altar 文字も、カロームテ称号も、「葉のあるジャガー」も、ウィ・テ・ナーフも、全て最初の生起例が石碑 31 であることと (Martin 2020: 404 n.26)、このモニュメントが古典期前期低地南部マヤ社会の情勢に変革をもたらすことになる「エントラダ」の記念碑的存在であることを、単なる偶然と捉えるべきではない。つまり、カロームテである「葉のあるジャガー」が、317年以前に Chi-Altar の地で、後々まで記録に残すべき何らかの重要なことを行ったという記述の背景には、「エントラダ」という歴史的事実が関与している、ということである。

石碑 31 の裏面に刻まれた長い碑文は、内容の点で三つの部分から構成されている。一つ目 (C17 まで) は、シフヤフ・チャン・カウィール2世がこの石碑を奉納した 9.0.10.0.0 の期間の終わりと、

過去の諸王が執り行った同種の儀礼について、二つ目（D17 から F23 まで）は、「エントラーダ」について、三つ目（E24 以降）は、シフヤフ・チャン・カウィール 2 世自身の治世に関わる出来事についてである（Stuart 2011: 1, 7）。すなわち、石彫奉納という「現在」から始まり、遠い過去に遡り、近い過去へと進み、最後に「現在」に戻る、という構成になっている。留意しなければ

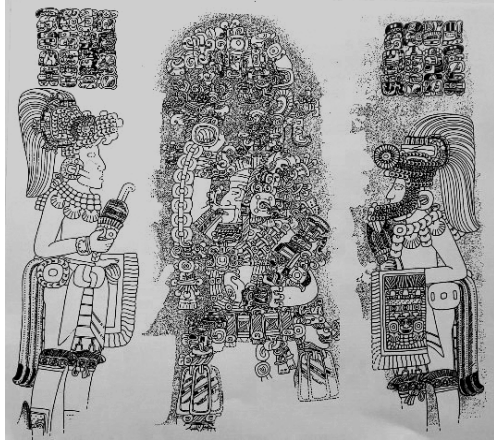


図 18 石碑 31 の正面と左右の側面の展開図 (Martin and Grube 2008: 35 の図を転載)

ならないのは、石碑 31 は確かに「エントラーダ」というティカルの歴史の画期を成す出来事を物語っているが、同時に伝統的なマヤ様式への回帰の企図を窺わせるモニュメントでもあるということである。このことは、建立者の父親のヤシュ・ヌーン・アイーン 1 世が、石碑の両側面でテオティワカン様式の衣装で表されているのに対し、正面に刻まれた主役のシフヤフ・チャン・カウィール 2 世は、伝統的なマヤ様式の装いで表現されていることから明らかである（図 18）。このマヤ的伝統への回帰は、その後の石碑の図像でも継続される（Borowicz

2003: 226-233）。

「葉のあるジャガー」と Chi-Altar 文字が生起するのは、先述の三部構成のうち、最初の部分、すなわち「エントラーダ」以前の時代について記されているくだりである。このことから、石碑 31 において、シフヤフ・チャン・カウィール 2 世は、自らの家系の権威が「エントラーダ」に由来することを顕示すると共に、それ以前のマヤの伝統とのつながりも強調していると言える。

(2) コパンにおける「エントラーダ」の余波

ティカルの次に Chi-Altar 文字が現れるのが、コパンの石碑 I である。これは古典期後期の最初の生起例であるが、ティカルに続いてコパンのモニュメントに Chi-Altar 文字が生起することは、先述の推測の蓋然性を高めているように思われる。なぜなら、コパンも恐らく「エントラーダ」と無関係ではないからである。

コパンを建国したキニチ・ヤシュ・クック・モ K'inich Yax K'uk'Mo' は、祭壇 Q の碑文に、8.19.10.10.17 5 カーバン (Kaban) 15 ヤシュキン (Yaxk'in) (426 年 9 月 5 日) に即位した後、8.19.11.0.13 5 ベン (Ben) 11 ムワン (Muwan) (427 年 2 月 8 日) に西のカロームテとしてオシュ・ウィティク Ox Witik、すなわちコパンに到着した、と記されていることから明白なように、コパン出身ではない (Martin and Grube 2008: 192-193; Sharer 2003a: 327, 329, 2003b: 144-145)。その出自は、遺体の骨のストロンチウム安定同位体の分析²¹ から中央ペテンであり、晩年をコパンで迎えたことが判明している (Fash 2001: 84; Sharer 2003a: 340, 2003b: 152, 158-159; Traxler

2001: 59-60)。現今では、他の考古学資料及び碑文史料等の研究により、カラコル Caracol の高位エリートの家系に生まれたキニチ・ヤシュ・クック・モが、ティカルの宮廷で青年期を過ごした後²²、コパンに赴いて新たな王国を樹立した、と推測されている (Price et al. 2009: 16-17; Stuart 2007; 鈴木 2021: 55-56)。

このように、Chi-Altar 文字が再び現れたのは、200年近い時間差があるものの、コパンのモニュメントであり、そのコパンを建国したキニチ・ヤシュ・クック・モは、「エントラダ」直後のティカルとゆかりがある可能性が高い。しかも、石碑 31 を建立したシフヤフ・チャン・カウィール 2 世は、8.18.15.11.0 (411年11月26日) に即位しているので、キニチ・ヤシュ・クック・モとほぼ同世代人である。つまり、「エントラダ」に関与したヤシュ・ヌーン・アイーン 1 世の子供のシフヤフ・チャン・カウィール 2 世の治世に、その宮廷で共に過ごしたかも知れないキニチ・ヤシュ・クック・モが建国した国がコパンであり、その建国者を記念するモニュメントに Chi-Altar 文字と、そこでの出来事の主役として「葉のあるアハウ」の名が刻まれているのである。

(3) Chi-Altar 文字と「エントラダ」の関連

三番目に Chi-Altar 文字が生起するのは、ティカルとコパンのほぼ中ほどに位置するプシルハである。古典期前期の終わり頃に建国されたプシルハの対外関係はいまだ不詳である。プシルハのモニュメントに刻まれたテキストは、古典期の主要国であるティカル、カラクムル (カーン王国)、コパンやカラコルについて一切触れていないし、逆にそれらの国のテキストもプシルハに全く言及していないためである (Prager et al. 2014: 298-300)。例外的に、9.8.0.0.0 (593年8月22日) という建国早々に建立された石碑 Q と、同日に建立されたカラコルの石碑 1 の碑文から、当時両者の間に文化的接触があったとの指摘もあるが、この関係がその後どうなったかは分からない。土器の観点からは、この国の住人は南西ペテン出身だと推測されている。

ただ、プシルハにも「エントラダ」との関連を窺わせる事柄が四つ存在する。一つは、初代王のカウィール・チャン・キニチが西のカロームテを称していることである。カロームテは「エントラダ」後初めて登場した尊称であり、マヤ地域で最初にこの地位に就いたのは、「エントラダ」の中心人物のシフヤフ・カフクである。しかも、彼はカウィール・チャン・キニチと同じく、西のカロームテを名乗っていた²³。古典期前期にカロームテを称したのは、ティカルの他にはカーン王国、コパン、コバーの王に限られていたが、古典期後期に入るとエヅナー Edzna、ラマナイ Lamanai、パレンケとトニナーが加わり、700年を過ぎる頃には、プシルハを含む更に12の国の王がこの称号を称えるようになる (Martin 2020: 81)。従ってプシルハは、カロームテに限られた特別な地位の国だけのものではなく、始まった時期に、この称号を用いるようになった国の一つである。その意味では、「エントラダ」との関連性は、ティカルやコパンほど濃厚ではないとは言える。二つ目は、プシルハが593年に、コパンの建国者キニチ・ヤシュ・クック・モの出身地である可能性の高いカラコルと文化的接触があったとの指摘である。カラコルを通じて、

プシルハとコパンの間に、間接的なつながりが生じる。この両国のつながりの可能性を更に示唆するのが、8.6.0.0.0 という日付が刻まれているのは、コパン（石碑 I と石碑 4）とプシルハ（石碑 K）の二ヶ所に限られる、という点である。最後に、石碑 P が建立されたのがコパンの石碑 I のわずか 19 年後の 647 年であり、この二つはほぼ同時代のモニュメントだということである。

このように、プシルハも、西のカロームテの称号保持やコパンとの関連から、「エントラダ」と関わりを持っていたことになる。

(5) Chi-Altar の候補地

以上のことから推して、Chi-Altar 文字が表すのは「エントラダ」と関わりのある地ではないか、という推論が成り立つ。その具体的な場所を追究する際に参考になるのが、Chi-Altar 文字の左上部を占める掌状の表語文字“chi”である。この文字が“chi”と読まれるのはほぼ異論がなく、その意味は「マゲイ」である（Martin 2020: 407; Tokovinine 2013: 59）。であれば、Chi-Altar 文字はマゲイと関連のある場所だと考えるのが妥当であろう。その候補地として、多くの研究者から名を挙げられているのがエル・ミラドルである。確かに、古典期のどの都市をも凌駕する巨大な都市を紀元前に築いたエル・ミラドルには、王朝の創始者が自らの出自として結び付けたいと思わせるだけの魅力がある。しかし、この都市が位置しているのは熱帯雨林地域である。それに対し、マゲイはメキシコ原産の植物だが、乾燥に強い特性を持ち、栽培地としてとりわけ知られるのがメキシコ中央高原である（Evans and Webster 2001: 5, 12; Miller and Taube 1993: 108; Nicholas and Pool 2012: 123; Peregrine and Ember 2001: 14-15, 261）。従って、Chi-Altar のモデルを捜すのならば、熱帯ジャングルに覆われたマヤ低地南部よりも、むしろこの地域の方が適合していると思われる。そのメキシコ中央高原で巨大な国家を建設したのがテオティワカンであり、直接的であれ間接的であれ、「エントラダ」を実現させるに至った国家である。そして、この「エントラダ」について詳しく記しているのが、Chi-Altar 文字が初めて生起するティカルの石碑 31 なのである。従って、テオティワカンこそ Chi-Altar 文字が表した場所に相応しいと推測されるのである。

5. おわりに

378 年にティカルで生じた「エントラダ」以降、低地南部マヤ社会は「新秩序」のもと再編成されていく。その由来が記されたのが石碑 31 であり、そこには「新秩序」のある種の起源地、あるいは「新秩序」が依拠する場所として、Chi-Altar 文字が現れる。この文字は、「エントラダ」の担い手やその後継者たちが、「エントラダ」を成功裏に導いた源泉であるテオティワカンを表す文字として考案したものと思われる。そして、Chi-Altar 文字の場所に言及することで、自分たちの出自がテオティワカンの権威に由来することを顕示した。その後、Chi-Altar の地は、低地南部マヤ社会で王朝創立者の権威の源として認識されるようになった。だからこそ、この

文字は先ずティカルで生起し、続いてコパンで現れたのであろう。しかし、時間の経過と共に、Chi-Altar がテオティワカンという実在の国家であると言う意味合いが薄れていったのではなかろうか。とりわけ、テオティワカンが衰退した古典期後期には、Chi-Altar は王朝の正統性を根拠付けるような一般名詞的地名になっていったのではないかと推測されるのである。ツイバンチェの断片は、その辺の事情を物語っているのであろう²⁴。

Chi-Altar 文字が最初に刻まれた石碑 31 は、「新秩序」到来の由来を物語ると同時に、マヤの伝統への回帰を宣言するモニュメントでもあった。後者の主張を具現するものとして生み出された文字が、「葉のあるアハウ」ではなかろうか。すなわち、「エントラーダ」によって「新秩序」を創り出し、あるいはこの体制を受け入れた国家が、伝統的マヤ勢力であることを強調するために作り出したのが「葉のあるアハウ」だったのではないか。そして、王朝創始者として考案された「葉のあるジャガー」文字が、マヤの伝統への回帰の過程で、王権に結びつくジャガーが、王そのものを表すアハウに変わったと考えたいのである。しかし、この考えにはなお十分な検証が必要であらう。

本稿では、Chi-Altar 文字がテオティワカンを表すのではないかとの説を提起した。しかし、まだ不明な点が少なくないのも事実である。以下に列挙すると、

- (1) 8.6.0.0.0 は何を記念する日なのか。この日はなぜコパンとプシルハのみで生起するのか。エル・ミラドールの放棄や、ティカルにおける王権成立とほぼ同時期だが、何か関係はあるのか。
- (2) 「葉のあるアハウ」の最古の生起例は 8.2.0.0.0 と結びつくが、この日は何を記念しているのか。
- (3) Chi-Altar 文字、「葉のあるアハウ」、8.6.0.0.0 の全てに共通するのだが、なぜ限られた都市でしか言及されないのか。

等々である。これらの疑問点については、また機会を改めて取り組みたい。

〔註〕

- (1) アステカ時代の公用語であったナワトル (Nahuatl) 語で、「葦の地」の意。マヤ語ではプフ (Puh)。
- (2) マヤ語で、「霧が立ち込めた地」の意。
- (3) ティカルを代表するピラミッド型建築の神殿1の体積が1万8300m³、テオティワカン最大の建築である太陽のピラミッドの体積が160万m³であるのに対し、ダンタ・コンプレックスのそれは280万m³である (Inomata 2020: Fig.9 c)。
- (4) ミラドール盆地は、グアテマラのベテン県の北端からメキシコのカンペチェ州にかけて広がる3000km²ほどの平坦な楕円形状をなす盆地で、エル・ミラドールやナクベ Nakbe を始めとする先古典期後期の主要遺跡が多数存在する (Hansen et al. 2009: 27)。
- (5) 墳墓内で出土した土器の年代は、600～650年頃と考えられている (Fash, B. et al. 2009)。
- (6) 都市の歴史に関する最古の日付は9.6.17.8.18 2 エツナップ (Etz'nab') 11 ツェック (Tzek) (571年6月19日) であり、逆に最後の日付は9.18.7.10.3 4 アクバル (Ak'ba'l) 1 ソツツ (Sotz') (798年3月26日) である (Prager et al. 2014: 250, 269)。
- (7) プシルハの王名のほとんどは完全には解読されていないので、原則的にアルファベットで代用されている (Prager et al. 2014: 271)。
- (8) 石碑Dと石碑Pによると、治世は9.6.17.8.18～9.10.15.0.0 (571年6月17日～647年11月7日) である (Prager et al. 2014: 273)。
- (9) この日はChi-Altar 文字の場所に関連する最古の日付に当たる (Wanyerka 2009: 317, 382)。
- (10) カロームテ称号については、支配者の称号のうち最上位のもので、ティカルやカーン王国のように、他国内政干渉で得る強力な国力を有するマヤ地域の「超大国」の王のみが称することのできる称号だと考えられてきた。しかし、マーティンの最近の研究によると、カロームテは政治的な職位というより社会的地位であった (Martin 2020: 77-83)。確かに、カロームテ称号が実質的な権力を伴う職位ではなく、敬称のような社会的地位だと解釈すると、他国に嫁いだカーン王国の王女がカロームテ称号を保持していたことや、古典期後期後半になって中小の新興国にカロームテを称する王が急増することの説明がつく。
- (11) 石碑KのC1からD6にかけて、王の判読できない固有の名前に始まり、ochk'in kalomte' k'uhul chan yon? k'ak'u...k'awil jol...k'uhul un? Ajaw 「オチキン・カロームテ、神聖な天、彼のリネージ、カック ... カウィール・ホル?、プシルハの神聖王」と続いている (Prager et al. 2014: 291)。
- (12) プラーガーらは、E王がオチキン・カロームテを称したことについて、自らの正統性が父方でなく母方の系統に由来する点で、新しい王朝の系譜を始めた可能性を示唆している (Prager 2014: 291)。しかし、同じ論文の中で、自らが正統な後継者であることを強調するために王朝の始祖に言及するのは、プシルハの歴代王の慣行であるとも述べている。
- (13) 古典期マヤ時代において、王位に就くのは基本的に男性であり、その意味でヨフル・イクナルは例外的な存在である。それにもかかわらず、彼女は20年以上にわたってパレンケを治めた (Martin and Grube 2008: 159)。

- (14) いわゆる蛇頭紋章文字の主字の読み方に関しては、近年ではカーヌル kanu'l がよく用いられるが (Martin and Velasquez García 2016)、本稿では従来用いられている「カーン」を踏襲する。
- (15) PSS と略される。定式化されたテキストで、もっぱら土器表面の口縁部や基底部に帯状に描かれる。PSS に続いて、土器の所有者の名前や称号が記される (Coe 1992: 224-225、245-248、265; Coe and Stone 2005: 99-103)。
- (16) 太陽のピラミッドの正面に張り出した基壇で、新しい火の儀式が催された場と考えられている (Fash, W., et al. 2009: 214)。
- (17) 近年の王朝土器の碑文の研究によると、カーン王朝の創始者と目されている「空を持ち上げる者 (Skyraiser)」王は、120 年から 250 年の間に統治していた (Canuto, et al. 2020: 376)。ちなみに、この建国者の名前にもバカプの要素が見られるのは興味深いし、ユクヌーム・チェン 2 世と関連してこの称号が用いられたのは偶然ではないであろう。なお、王朝土器とは、コデックス様式土器のうち、カーン王朝の王名が記された 11 ほどの土器のことである。「空を持ち上げる者」を始めとして、19 人の王の名前や即位が記されているが、碑文で確認される王名と異なる名前が多い。そのため、伝説上の存在ではないかと、これらの王の存在を疑う説もある (Martin 1997: 862; Martin and Grube 2002: 102)。
- (18) エスパルサ・オルギンらは、G5 の文字が「葉のあるアハウ」と類似すると指摘するが、図から判断する限り不明瞭であり、推論の域を出ないと思われる。
- (19) 「到着」の意であるマヤ語は、新しい王朝の樹立と言う意味合いでしばしば使われる (Martin and Grube 2008: 29)。
- (20) マーティンとグルーベによる命名 (Martin and Grube 2008: 29)。
- (21) スロンチウム安定同位体分析については、鈴木 (2021) を参照。
- (22) カラコルは、6 世紀半ばにカーン王国の傘下に入り、対ティカル戦の戦端を開いた国であるが、その少し前の 9.5.19.1.2.9 イク (Ik') 5 ウォ (Wo) (553 年 4 月 16 日) にヤハウ・テ・キニチ Yajaw Te' K'inich が即位した際に、ティカル王ワク・チャン・カウィール Wak Chan K'awil が後見していることから、当初はティカルの庇護下にあったようである (Martin 2020: 344-346; Martin and Grube 2008: 88-89)。
- (23) カロームテはしばしば方位と結びついて用いられた。中でも、最も多いのが西で、西のカロームテを称したものは 34 人ほどが確認されている (Martin 2020: 79-80)。ちなみに東、南、北と結びついたカロームテを称した者の数は、それぞれ 7 人、2 人、2 人いる。
- (24) そのツイバンチェも、「新秩序」の影響の埒外にはなかったとマーティンは示唆している (Martin 2020: 188-189)。

参考文献

Bezanilla, Clara

2006 *Pocket Dictionary of Aztec & Maya Gods & Goddesses*. The British Museum Press, London.

Borowicz, James

2003 Images of Power and the Power of Images: Early Classic Iconographic Programs of the Carved Monuments of Tikal. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by Geoffrey E. Braswell, pp.217-234. University of Texas Press, Austin.

Braswell, Geoffrey, Christian M. Prager, Casandra R. Bill, Sonja A. Schwake, and Jennifer B. Braswell

2004 The Rise of Secondary States in the Southeastern Periphery of the Maya World: A report on recent archaeological and epigraphic research at Pusilha, Belize. *Ancient Mesoamerica*, vol. 15, no. 2, pp.219-233.

Brown, Clifford T. and Walter R. T. Witschey

2016 Tikal. In *Encyclopedia of the Ancient Maya*, edited by Walter R. T. Witschey, pp.344-351. Rowman & Littlefield, Lanham.

Coe, Michael D.

1992 *Breaking the Maya Code*. Thames and Hudson Ltd, London.

Coe, Michael D. and Mark Van Stone

2005 *Reading the Maya Glyphs, Second Edition*. Thames & Hudson Ltd, London.

Diehl, Richard A.

2004 *The Olmecs: America's First Civilization*. Thames & Hudson Ltd., London.

Esparza Olguin, Octavio Q. and Vinia E. Pérez Gutierrez

2009 Archaeological and Epigraphic Studies in Pol Box, Quintana Roo. *The PARI Journal*, vol. 9, no. 3, pp.1-16.

Evans, Susan Toby and David L. Webster (eds.)

2001 *Archaeology of Ancient Mexico and Central America: An Encyclopedia*. Garland Publishing Inc., New York.

Fash, Barbara, Scott Fulton, Martha Labell, Nawa Sugiyama, and Marc Zender

2009 Peccary skull no. 2, Tomb 1, Copan Honduras. FYI Friday, The Peabody Museum, February 13, 2009.

https://www.academia.edu/4164624/Peccary_Skull_No_2_Tomb_1_Copan_Honduras_and_A_Report_on_the_New_Peccary_Skull_Glyphs_with_B_Fash_S_Fulton_M_Labell_and_N_Sugiyama

Fash, William L.

2001 *Scribes, Warriors and Kings: The City of Copán and the Ancient Maya*. Thames & Hudson Ltd, London.

Fash, William L., Alexandre Tokovinine and Barbara Fash

2009 The House of New Fire at Teotihuacan and its Legacy in Mesoamerica. In *The Art of Urbanism: How Mesoamerican Kingdoms Represented Themselves in Architecture and Imagery*, edited by William L. Fash, and Leonardo Lopez Lujan, pp.201-229. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.

Grube, Nikolai

2004 El origen de la dinastía Kaan. En *Los Cautivos de Dzibanché*, editado por Enrique Nalda, pp.117-131. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Hansen, Richard D.

2000 The First Cities — The Beginnings of Urbanization and State Formation in the Maya Lowlands. In *Maya: Divine Kings of the Rain Forest*, edited by Nikolai Grube, pp.50-65. Könemann Verlagsgesellschaft mbH, Cologne.

2016 Cultural and Environmental Components of the First Maya States: A Perspective from the Central and Southern Maya Lowlands. In *The Origins of Maya States*, edited by Loa P. Traxler and Robert J. Sharer, pp.329-416. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.

Hansen, Richard D., Wayne K. Howell, and Stanley P. Guenter

2008 Forgotten Structures, Haunted Houses, and Occupied Hearts: Ancient Perspective and Contemporary Interpretations of Abandoned Sites and Buildings in the Mirador Basin, Guatemala. In *Ruins of the Past*, edited by Travis W. Stanton, and Aline Magnoni, pp.25-64. University Press of Colorado, Boulder.

Inomata, Takeshi, Daniela Triaden, Verónica A. Vázquez López, Juan Carlos Fernandez-Díaz, Takayuki Omori, María Belén Méndez Bauer, Melina García Hernández, Timothy Beach, Clarissa Cagnato, Kazuo Aoyama & Hiroo Nasu

2020 Monumental architecture at Aguada Fénix and the rise of Maya civilization. *Nature*, vol. 582, no. 7813, pp.530-553.

Macri, Martha J.

2011 Late Preclassic Texts from Mexico and Guatemala with Reference to Southern Guatemala. In *The Southern Maya in the Late Preclassic*, edited by Michael Love and Jonathan Kaplan, pp.175-199. University Press of Colorado, Boulder.

Martin, Simon

2003 In Line of the Founder: A View of Dynastic Politics at Tikal. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State*, edited by Jeremy A. Sabloff, pp.3-45. School of American Research Press, Santa Fe.

2005 Of Snakes and Bats: Shifting Identities at Calakmul. *The PARI Journal*, vol. 2, no. 2, pp.5-15.

2016 Ideology and the Early Maya Polity. In *The Origins of Maya States*, edited by Loa P. Traxler, and Robert J. Sharer, pp.507-544. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.

2020 *Ancient Maya Politics: A Political Anthropology of the Classic Period*. New York, Cambridge University Press.

Martin, Simon and Nikolai Grube

2008 *Chronicle of the Maya Kings and Queens, Second Edition*. Thames & Hudson Ltd, London.

Martin, Simon and Erik Velásquez García

2016 Politics and Places: Tracing the Toponyms of the Snake Dynasty. *The PARI Journal*, vol. 17, no. 2, pp.23-33.

Milbrath, Susan

1999 *Star Gods of the Maya: Astronomy in Art, Folklore, and Calendars*. University of Texas Press, Austin.

Miller, Mary and Karl Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of The Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames & Hudson Ltd, London.

Nicholas, Deborah L. and Christopher A. Pool (eds.)

2012 *The Oxford Handbook of Mesoamerican Archaeology*. Oxford University Press, New York.

Nondédéo, Philippe, Lilian Garrido, Alejandro Patiño, Alfonso Lacadena, Ignacio Cases, Eva Lemonnier, Dominique Michelet, Julien Hiquet, Chloé Andrieu, Carlos Morales-Aguilar, Julio Cotom, Louise Purdue, Divina Perla, Hemmamuthé Goudiaby, Giovanni Gonzáles, Céline Gillot, Alejandra Días, Jacklene Quiñonez, Isaac Barrientos, Julien Sion, Lydie Dussol, y Mariana Colin.

2015 Una Mirada hacia Naachtun después de cinco años de investigación (Proyecto Naachtun 2010-2014). XXVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, editado por Bárrera Arroyo, Luis Méndez Salinas y Lorena Paiz, pp.115-147, Ministerio de Cultura y Deportes: Instituto de Antropología e Historia: Asociación Tikal, 2015, Guatemala.

Nondédéo, Philippe, Alfonso Lacadena García-Gallo y Juan Ignacio Cases

2019 Teotihuacanos y mayas en la entrada de 11 Eb'(378d.C.): nuevos datos de Naachtun, Péten, Guatemala. Revista Española de Antropología Americana, 49 (Especial), pp. 53-75.

Prager Christian M.

2004 A Classic Maya Ceramic Vessel from the Calakmul Region in the Museum zu Allerheiligen, Schaffhausen, Switzerland. *Human Mosaik*, vol. 35, no. 1, pp.31-39.

Prager, Christian M., Beniamino Volta, and Geoffrey E. Braswell

2014 The Dynastic History and Archeology of Pusilha, Belize. In *The Maya and their Central American Neighbors : Settlement patterns, architecture, hieroglyphic texts, and ceramics*, edited by Geoffrey E. Breswell, pp.245-307. Routledge, London.

Peregrine, Pater N. and Melvin Ember (eds.)

2001 *Encyclopedia of Prehistory, Volume 5: Middle America*. Kluwer Academic/Plenum Publishers.

Price, T. Douglas, James H. Burton, Robert J. Sharer, Jane E. Buikstra, Lori E. Wright, Loa P. Traxler, and Latherine A. Miller

2009 Kings and commoners at Copan: Isotopic evidence for origins and movement in the Classic Maya period. *Journal of Anthropological Archaeology*, vol. 29, pp.30-31.

佐藤孝裕

2014 「「ウィ・テ・ナーフ」についての一考察」『史学論叢』、第44号、14－54頁。

史学論叢 第51号 (2021年3月)

鈴木真太郎

2021 『古代マヤ文明 栄光と衰亡の3000年』中公新書。

Schele, Linda and David Freidel

1990 *A Forest of Kings: The Untold Story of the Ancient Maya*. William Morrow and Company, New York.

Sharer, Robert J.

2003a Tikal and Copan Dynastic Founding. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State*, edited by Jeremy A. Sabloff, pp.319-353. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.

2003b Founding Events and Teotihuacan: Connections at Copán, Honduras. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by Geoffrey E. Braswell, pp.143-165. University of Texas Press, Austin.

Sharer, Robert J. with Loa P. Traxler

2006 *The Ancient Maya, Sixth Edition*. Stanford University Press, Stanford.

Stuart, David

2004 The Beginnings of the Copan Dynasty: A Review of the Hieroglyphic and Historical Evidence. In *Understanding Early Classic Copan*, edited by Ellen E. Bell, Marcello A. Canuto and Robert J. Sharer, pp.215-247. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.

2007 The Origin of Copan's Founder. Maya Decipherment.

<https://mayadecipherment.com/2007/06/25/the-origin-of-copans-founder/>

2014 A Possible Sign for Metate. <http://mayadecipherment.com/2014/02/04/a-possible-sign-for-metate/>

2011 Some Working Notes on the Text of Tikal Stela 31. Mesoweb : www.mesoweb.com/stuart/notes/Tikal.pdf.

Stuart, David and George Stuart

2008 *Palenque: Eternal City of the Maya*. Thames & Hudson Ltd, London.

Taube, Karl

1995 *Aztec and Maya Myths*. University of Texas Press, Austin.

Tokovinine, Alexandre

2013 *Place and Identity in Classic Maya Narratives*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Traxler, Loa P.

2001 The Royal Court of Early Classic Copan. In *Royal Court of the Ancient Maya*, edited by Takeshi Inomata and Stephen Houston, pp.46-73. Westview Press, Oxford.

Wanyerka, Philip Julius

2009 Classic Maya Political Organization: Epigraphic Evidence of Hierarchical Organization in the Southern Maya Mountains Region of Belize. A Doctoral Dissertation. Southern Illinois University, Carbondale.